

「都市」社会学の可能性：『ミッドウルタウン』から考える（<小特集>シンポジウム報告-『ミッドウルタウン』の今日的意義）

著者	町村 敬志
雑誌名	年報筑波社会学
号	2
ページ	117-123
発行年	1990-09
URL	http://hdl.handle.net/2241/107960

「都市」社会学の可能性

—『ミッドウルトン』から考える—

町村 敬志

1. 『ミッドウルトン』は都市社会学の古典か？

とにかく古典などというものは、あまり読まれることがないと相場が決まっている。リンド夫妻 (Lynd, R.S. & H.M.) の著書『ミッドウルトン』(1929)、『変貌するミッドウルトン』(1937) もまた、日本ではこうした作品の例外ではなかった。その理由のひとつは、よい翻訳がなかったことにあるわけで、今回の翻訳刊行により、状況は変わるに違いない。

それはともかく、名前ばかりが先行する場合の常として、『ミッドウルトン』に関しても、日本国内であまり根拠のない固定観念が広まってしまったことは否定できない。約10年ほど前、初めてこの2冊の分厚い著作を手にとったとき、筆者もまたこうした予断から自由ではなかった。『ミッドウルトン』はコミュニティ研究の名著であり、またそれゆえ都市社会学の名著であると。

確かに前者は正しい。だが、後者はどうであろうか。これがそのときの筆者の感想であった。当時筆者は、アメリカ都市の歴史をたどるため、20世紀初頭の都市ルポルタージュ、産業都市を対象とした初期の都市総合調査の一つ「ピッツバーグ調査」、そしてシカゴ学派の都市社会学の諸著作を、順に読み進んできていた。そんな筆者にとって、この作品は、確かに他とはやや異質なものに映った。だいたい、対象となったこの町は、人口がたったの3万人あまりに過ぎない。それはたして都市という名に値するのだろうか。

しかし他方で、そこから得た印象というのは、実に強烈なものであった。「完結した小宇宙」にみえるコミュニティが実は巨大な社会変動の最前線にいるという事実が、コミュニティの微細な事実の羅列の中から見事に浮かび上がってくる。地域社会論における実証研究の魅力とは、具体性のレベルで、社会

構造と生活世界との関わりが明らかになることにあると筆者は考えるが、『ミッドウルトウン』はまさにそのような質を備えた作品であった。

結論からいうと、『ミッドウルトウン』はいわゆる都市社会学の研究書として書かれたものではない。またコミュニティ研究であることは事実としても、その基本的課題は、必ずしもコミュニティの構造説明自体にあったとはいえない。課題はあくまでも、アメリカ全体の社会変動、文化変動の説明にあったというべきだろう。

このことは筆者たちの序文にも明らかなだし、またその後におけるアメリカ国内での大きな反響もこうした基本的ねらいを抜きにしては理解できない。いうまでもなく、『ミッドウルトウン』では19世紀末以降の産業化が、また『変貌するミッドウルトウン』では1930年代の不況が、それぞれの変動の主役であった。したがって、その評価の視点もまた、あくまでも社会変動論という文脈を無視することができない。このことは、まず最初に強調しておかなければならない。

だが、社会学的研究の長い歴史のなかで、「都市」の位置をもう一度考えてみよう。そうすると、次のような姿が明らかになってくる。「都市」とはそもそも、巨視的な社会変動の——多くは先取りされた——実験場であった。また、「都市」の社会学とは、近代に入って時代の変化を先取的に体现してきた「都市」を対象とすることによって成立し、「都市」の変化とともに変貌を繰り返してきた。

だとするならば、「産業化」と「不況」を主役とする変動の物語である『ミッドウルトウン』研究は、巨大都市を扱ってはいないものの、こうした本来の社会学的都市論に非常に近いところに位置することが明らかになる。以下では、『ミッドウルトウン』研究のスタイルを一つの導きの糸としながら、「都市」の社会学のあり方について考えていくことにしよう。

テーマは次の逆説である。すなわち、「都市」の社会学とは、時代の変化に敏感に反応する「都市」の研究を通じて、自らを構築していく。だが、一度構築された「都市」理論は、いずれ社会一般の理論へと解消され、「都市」理論としての個性は喪失する。いわば、「都市」の社会学の最先端部分は、社会変動を先取的に理論化することにより、常に「都市」社会学自らの存立の根拠をも掘り崩していくと。『ミッドウルトウン』もまた、「都市」論と「変動」論

の中間の微妙な地点に位置しており、その魅力もまた多くはここに由来すると考えられる。

2. 繰り返される「都市」社会学の「解体」

時代の変化を先取りすることにより、常に自らの「死」をも先取りしてしまうのが、「都市」社会学の宿命だといった。あるいはまた、「都市」社会学の歴史とは、その「死」の繰り返しの歴史だといえるかもしれない。こうした観点から、「都市」を扱う社会学の歴史を眺めたとき、そこにはいくつかの段階が存在することに気がつく。

その第一段階は、皮肉にも社会学の誕生とともに訪れた。しばしば指摘されるように、社会学は、二つの革命、すなわち近代の市民革命と産業革命後の近代市民社会を認識する学問として生まれ成長を遂げてきた。ここで、市民革命と産業革命の主要な舞台が都市であったことを想起すれば、社会学とはそもそも「都市」社会学であったといえるかもしれない。だが、そうである限り、この社会学は、遅かれ早かれ固有性をもつ対象としての「都市」を失う運命にあったといってもよい。

なぜなら、近代化のもう一つの重要な側面として、都市化がやはり同じ地平からスタートしたからである。都市化は、都市の重要性を著しく増大させ「都市」認識への関心を大きく高めはした。しかし反面で、社会全体の都市化への道を開き、「都市」じたいの曖昧化を招く原因ともなった。もはや「都市」とは、ある種の絶対性を備えた固有の存在ではなく、「農村」との対比によってのみ定義づけられるような相対的な「ラベル」にしかすぎなくなったのである。

社会学における「都市」の死にいくつかの段階があるとすれば、そもそも社会学というものの出発点が、「死」の第一段階だったのである。

では「死」の第二段階はいつか。それは、巨大都市が世界各地で成立し、さらに大衆消費社会がスタートした時であった。「都市」は社会変動の巨大な機械として作動を始め、新たな生産と消費のシステムへと人々を巻き込んだ。ここにおいて、都市の空間形式と社会形式の関連が明確に認識されるようになり、また社会諸科学の独自の研究対象としての「都市」が浮上してきたのである。

19世紀後半のイギリス諸都市（特にロンドン）、20世紀初めのシカゴ、狭義の「都市社会学」はここでその第一歩を記した。しかし、それは再び皮肉にも、都市社会学の「死」の第二段階の幕開けでもあったのだ。

イギリス諸都市を相手にした19世紀後半のエンゲルス（F.Engels）、メイヒュー（H.Mayhew）、ブース（C.Booth）ら、そしてシカゴとともに生まれたシカゴ学派、彼らは、それぞれ独特のやり方ではあるが、新しく生まれたメトロポリスを認識しようと試みた。「都市」に関する狭義の社会科学はここにおいて成立したといってもよい。だが、そこで得られた成果の一般化を試みようとするやいなや、彼らの議論はたちまち「都市」を突き抜けることとなった。

エンゲルスは言うに及ばない。ブースらは、都市から出発した研究の出口を福祉や宗教に見つけ出そうとした。また、シカゴ学派都市社会学を理論的に総合したといわれるワース（L.Wirth）のアーバニズム論が、「都市」に発想の根を持つてはいるものの、結果的に資本制国家における大衆消費社会の理論となっていたことも、その典型例といってよいだろう。

都市＝大衆社会＝社会問題集中という三位一体的都市論は、第二次大戦後の急激な都市化の進展の中で大きく勢力を伸ばしていった。だが、そこでは、「都市」とは何かが深く問われることはなかった。いやむしろ、60年代がとりわけそうであったように、「都市」は問題の焦点としてあまりにも自明の存在であったため、改めて問われる必要もなかった、といった方がよいのかもしれない。

この間、シカゴ学派の呪縛のもとで理論的には長く停滞を続けた都市社会学が、再び大きく動き出したのは、ようやく1970年代になってからだった。それは、アメリカではなく、ヨーロッパから始まった。

「アーバニズム」というイデオロギーへの批判から始まり、マルクス主義や構造主義からエネルギーを補給されながら展開を始めた都市社会学の新しいトレンドは、やがて「新都市社会学」（New Urban Sociology）という奇妙な名前前で総称されるに至った。

「都市」を批判することから始めたこの「都市」認識の試みは、「都市」の根拠として「国家」を選んだ。集合的消費に「都市」の本質を見い出そうとしたカステル（M.Castells）が、その代表である。このことは、決して不思議で

はない。なぜなら、この段階の「都市」の再生産のためには、「国家」という存在が不可欠だった——少なくとも当時はそのように見られた——からである。

しかし、この選択はまたもや「都市」の死と無縁ではなかった。考えてみれば、市民社会への国家介入はある段階の資本制社会にとって不可避の道であり、何も都市だけに限って見られる現象ではない。確かに介入を強く求める特質というものを「都市」が持つことは事実だが、しかしそれを「都市」認識の根拠に据えようとする試みは、いずれ矛盾に達せざるを得ない。事実、カステルはこの点を繰り返し批判され、また集合的消費にこだわるあまり空間としての「都市」を放棄してしまう都市社会学者さえ現れた。こうして第三の「死」に、われわれは直面することとなった。

そして今、われわれは、「都市」の社会学の——それゆえその「死」の——第四の段階に足を踏み入れようとしている。これが、グローバル化の道である。

人や情報、物財の移動のグローバル化にともない、国家の範域を超えるネットワークがより実質的なものとして成立しつつある。それにともなって、グローバルなネットワークの結節点としての都市が重要性をもつようになった。

都市は、グローバルな「流れ」の中の結節点として、中心性と媒介性を純粹に体现する地点として、社会科学におけるその固有性を回復したのである。と同時に、都市間関係・都市間システムも重要性を増した。加えて、都市という「単位」の間に成立する秩序立った関係を捉えるための切り口として「空間」——もはや単に物理的空間にとどまらないが——が、たびたび言及されるようになった。

いわば、「世界」が「都市」という点によって構成されるようになることによって、「世界」自体が「都市」となった。と同時に、「世界」が直接「都市」に介入することによって、「都市」が「世界」となったのである。

だが、すでに明らかなように、グローバル化は何も「都市」だけを覆うわけではない。それは、地球上のあらゆる地点を巻き込むことを最終的なゴールとしている。したがって、この方向選択が、第4の「死」への道のりの第一歩であることはほぼまちがいない。

しかも、このグローバル化は、もうひとつ別の変動である高度情報化と連動し、グローバル都市化と電腦都市化を同時に進行させる可能性がある。この段

階の「都市」を理解することは知的な作業としてとても興味深いものではある。しかし、これらの変化は、長期的には、旧来の社会形式としての「都市」に対して最終的な「死」を宣告する可能性さえもっている。

いまこうした段階において、社会学は「都市」に対してどのような視線を確保することができるのか。このことが、われわれに問われている。

3. 『ミッドウルトン』から学ぶこと

少し先を急ぎすぎたかもしれない。本論は、この問いに答える場ではもちろんない。話を『ミッドウルトン』に戻すことにしよう。この著作は、いま述べた第二の段階に続く位置にあり、第二の意味をより明確にするとともに、第三の方向をいち早くさし示しているといっていよう。こうした先見性はそれ自体価値のあるものといっていよう。

だが、すでにそれらを通り過ぎてしまったわれわれにとって、先見性だけでは改めて振り返る意味があまりない。むしろ重要なのは、都市そして都市研究の移行期において、リンド夫妻が示した研究のスタイルの方であろう。コミュニティの微細な変動から全体社会の変動を透かしてみる技法は、現在も意義を失っていない。

アメリカ最初のノーベル文学賞授賞者のシンクレア・ルイス (S. Lewis) が『本町通り』(1920年)で描いたような「古き良き」コミュニティの幻想は、伝統的なアメリカン・スピリットとも結び付き、ミッドウルトンでも一つの神話を作り出していた。こうしたコミュニティが、産業化のブームによって、また不況の嵐の中で、変貌を遂げ、次第に新しい構造を獲得していくさまを描くリンド夫妻の筆は、実に緻密である。

たとえば、グローバル化などという、まだラフな形でしか全貌が明らかにされていない変動の都市的意味を探る場合にも、こうした緻密な分析方法は大きな力を発揮することだろう。

これに関連してもう一点、社会学の立場からの『ミッドウルトン』評価では抜け落ちがちな点を指摘しておきたい。社会学史上における『ミッドウルトン』に対しては、コミュニティ研究の代表作という評価を除けば、社会階層や

権力構造の先駆的業績、または初期の消費社会分析などの評価が、与えられてきた。またその方法論について、自らの調査方法を明示した最初の作品ということが言われてきた。

これらの評価は決して誤りではない。しかしそれらが、『ミドゥルタウン』研究の本来のねらいに対する評価ではないことは、是非とも指摘しておきたい。彼らの業績として異彩を放っているのは、そしてまた彼らのもともとのモチーフとして重要なのは、変化を余儀なくされたミドゥルタウン・スピリットの行方に関する分析であった。ここではその内容自体に触れる余裕はもうない。

重要なことは、社会変動を支える精神、またはそれに刃向かう精神自体の変動分析を、コミュニティの社会変動分析においても、もっと重視すべきだということだろう。変動というと、とかく産業経済や社会階層、政治権力に目が行きがちだが、こうした点はもっと検討されてよい。

『ミドゥルタウン』から出発したのに、話はずいぶんそれてしまったようだ。考えてみれば、ここで述べたような「都市」社会学を実践するのは、そうたやすいことではない。

「都市」社会学は、時代を先取りすると同時に、自らの死をも先取りしている。これは、皮肉ではあるが、「都市」の必然である。したがって、そこには一種の緊張が常に伴うことになる。他方、幻想としての都市に安住し自己解体への道を閉ざしてしまった「都市」社会学は、初めから「死んでいる」、こういっても過言ではないだろう。

『ミドゥルタウン』は、単なるコミュニティ研究から社会変動論へと浮上していくことによって、逆にすぐれた「都市」研究として生き残ることができた。われわれに、このような作品が残せるであろうか。このことは、ひとえに、変化する時代の行方をみつめるわれわれ自身のまなざしのありかにかかっている。

(まちなみ たかし／筑波大学)